水俣－１９８９

最首　悟

この一年、水俣に行かなかった。身体とアルバイトと水俣の事情による。この三つの理由がどのくらいの比率になるか。２－４－４か、３－３－４か、２－２－６か、なかなか決められない。

身体はハウスダストの減感作と吸入主体で、それも今度ばかりはそうとう規則正しく続けることで、喘息の発作は起こしていない。喉もとまできて止っている。ただ、今まで水俣から帰ってくると発作を起こしていたという指摘があり、発作を起こしていないからといって、無茶して、帰ってから起こしたらどうするんですか、といわれると、それもそうであると腰くだけになる。

アルバイトは、高校二年以上の子を三人抱えた生活のしがらみと、医学系入試小論文という特殊な分野の需要増から、泥沼にはまったようになっている。もっとも、生活の必要を越えた分については、いやなら断ればいいわけなのだが、学問の問題と水俣病と星子の三がらみが予備校での授業内容だから、やっぱり足抜けができなくなってくる。それに受験生は真剣に聞いてくれる。

さて、水俣の事情は、というと、これは文字にするのがたいへん難しい。１９８９年の水俣の事情について、ある種の当事者であることと、どんな当事者かを説明することがあまりできないという理由から、水俣の事情を整理することや、どうして行くのをためらったかを文字にするのは、なんだかすごく難しそうな気がする。

とにかく行かなかった。そのかわり、というわけでもないが、出版社の都合で延び延びになっていた、浜元さんの『出月私記』が急に出ることになったので、急遽体裁をととのえる作業を夏にやった。それまでに用意した年表の量が大幅に足らなくなった、というので、ふーふーいいながらつくりあげたことを指す。水俣病の理解に資する文章を４０枚くらいつけてほしい、と言われてつけた前文につき、実川悠太君から１０箇所くらい訂正や改善の指摘をもらった。ありがたかった。もっとも再版が出るあては今のところ皆無である。もともと浜元さんの聞き書きは、不知火グループの仕事として取り組んだので、とにかく出版にこぎつけたことで、直接作業をしてくれたメンバーには、少し顔向けができる。浜元さんには、遅れたことのお詫びかたがた、印税の８割に当る本を送った。さいわいすぐ売れて、追加注文したいと連絡があったので、このほうも少し面目が保てた。

水俣の事情に移る。まず甘夏問題につき、相思社が極悪非道の詐欺をやったとはどうしても思えない。この態度が書きにくくする。そんな態度とっていたら孤立しますよと電話でいわれたこともある。支援者というレベルでは、相思社はひどいということを明示的な前提にして話を進めるらしい。

大体マーマレードをつくるなんてことをしなければ、今甘夏にかけている農薬では危険なことはない。ふんだんにかけている丸田印（芦北・田浦の全国的ブランド）の甘夏だって毒物だということもない。それを相思社は消費者に毒をくらわせたというようで

は、話はちがってくるのではないか。

甘橘類にかける農薬は、ほかの作物でも同じだが、かける本人がダメッジを受けるというのが基本である。残留性が強くない場合は、生産者の健康が一番問題である。連れ合いの実家の広島の島では、農薬散布後、３日は寝込むという時代があったという。それを何回も毎年続けるのである。水俣の甘夏というとき、まずこの事が関心事でなければならぬと思う。つまり消費者の健康よりも水俣病患者である生産者の健康を気遣うのが先なのである。こう書くとまた怒られそうだが、水俣病患者の健康状態や生活がすこしでも改善されるのであれば、農薬づけの甘夏だって買うよという姿勢があるはずだ。だから、低農薬の甘夏というキャッチフレーズと、水俣の甘夏というキャッチフレーズは同じ意味ではない。後者にはどうしたって水俣病患者支援の視点が入っている。

次に、農薬使用は確実に動植物を傷つけ殺すのだから、生態環境は擾乱し、まわりまわって人間の健康に影響が及んでくるだろうことを考える。低農薬から無農薬化、有機農法への視点はほとんどここにある。食物を食べて直接人体に影響が出るような農薬・添加物はさすがに行政も許可していない。もっとも長期微量汚染や複合汚染となると話は別である。

私たち都会の消費者が食物に気をつけるのは、この点である。そのための対策は、ほとんど１つしかない。それは１種類の食物を大量に摂らぬことである。添加物なし、低農薬の食品はなるたけ求めたいが、それはけっこう生活に余裕がなければできない話である。一度に大量に摂らぬという点では、甘夏はあてはまる。水俣の甘夏はいっぱい食べたいと思っても、１シーズンに何個食べるだろう。温州やハッサクも食べたい。となるともっと減る。

私のすぐ下の弟は、甘夏を毎日必ず半箇食べたいという欲求をもっているので、なるべく水俣の甘夏を届けるようにしているけれど、このような男は珍しい。自分の身体のことだけ考えれば、私たちのふつうの消費量で言えば、丸田印でもかまわないのだ。そして丸田印と水俣の甘夏のどっちがうまいかといえば、これは微妙だ。味でいえば、農薬がかかっていようといまいと、一般的には、御所浦産がまさる。味は地の利と、堆肥をどれだけくれるかにかかっている。だから、堆肥中の微生物を殺さないような農薬があるとすれば、味のうまさ（水分、酸味、糖度、さわやかさ、歯ごたえ）と農薬は共存できる。しかしそれは、あくまでも消費者のエゴである。

まとめると、水俣病患者（認定、申請を問わず）の身を案じ、環境汚染を少しでも防ごうとし、そして自然に近く育った作物のほうがたぶん美味しいといういささか神話めいた思い込みで、私たちは水俣の甘夏を購入しているのである。

この順序を忘れたくない。

「野の花空の鳥」という通信を所沢で出している滝谷美佐保さんは、私と共通する問題意識で、相思社問題を２回とりあげている。最新号（第７号）では、『「毒物を消費者に食べさせてしまった、という一番大事なことについて」相思社は一言もないままに、「ガイア」をつくり「きばる」の事務をやろうとするのですから、もうこわくて「きばる」の甘夏は買えないな、というのがぼくや仲間たちの正直な感想』という、送られて

きた文章を批判している。「今まで甘夏を買い続け、しかも全く疑うということをしないで同志会の甘夏を信用し」てきて、そのために相思社を断固糾弾している人たちには、内省や（水俣病問題や共生の）苦しみがうかがわれない、と言っている。

旧同志会の解散を認めず、その呼称を使う佐藤武春さん兄弟の２家族をのぞく、同志会メンバー全員と新たに御所浦の申請患者家族（主に同志会の準会員だった家族だと思う）が「きばる」をつくって、自己批判しながら、再スタートしようとしている。それに対して、「きばる」の甘夏はこわくて食えない、という立場は、ほとんど水俣病患者運動に敵対している。

相思社は憎んでもいい。「ガイア」を否定してもいい。大きく言って支援の立場の者の間の問題である。しかしケサが憎いからといって本体の水俣病患者の生活というボウズを否定するようなことはあり得ない。また相思社というボウズが憎いからといって、相思社の活動の歴史や成果をすべて否定することもあり得ないのである。

まとめる。都会の者が、オレたちに毒を食らわしたと言って、水俣病患者を見捨てる、などということがあってたまるか。話はまったく逆じゃないか。オレたちに毒を食らわしたと怒っているのは、水俣病の人たちなのだ。それに対して、企業と国に怒ってくれ、もし私たちに怒っているなら筋違いだ、という都会者の仲間にはすくなくとも入りたくない、水俣病を引き起こし、しかも湮滅しようとした責任の一端はまわりまわって自分たちにもあるのではないかという思いにかられている者が水俣にかかわっている。もちろん国と企業の告発に専念して、自分の加害性などまったく意識しない人もいる。でもそれは小数だと思う。公害に対する立場は加害か被害しかなく、それ以外の第三者的立場はない、という宇井さんの言葉は今でも生きている。被害と加害の立場は同一人に何層にもわたって存在するという考えの深まりはあったにしても、基本的に都会生活をする者は加害の立場にいるのである。

相思社自体の問題はどうか。反患者の立場をとる憎むべき存在と化したのか。そうだ！という声が現にあるので困ってしまうが、甘夏キロあたり１０円の手数料が暴利だとは思われないし、相思社が、低農薬化にかならずしも乗り気でない患者を説いて回ってつくった果樹同志会発足の頃、患者を食い物にした相思社の金もうけと見た者は一人もいなかったはずだ。甘夏の低農薬化は、患者の健康のためにも、患者運動の理念としても、そしてその理念に呼応する消費者増大による患者の生活の安定のためにも、大いに益する方針であった。

呼びかけた手前と、成り手が他にいるはずもないという二つの理由で、相思社が同志会の事務局を担当したのは必然である。しかし誤ったことが２つある。１つは低農薬の危険性、すなわち売物にならない、虫害・病気で全滅という危惧をもつ患者の説得にあたって、生産高の完売を相思社が保障したことである。やむをえないことである。ただでさえ不安定な患者の生活を見ながら、理念のための冒険を説くわけにはいかない。しかし、需要がのびて８００トンにも達してなお完売原則を貫こうとしたのは誤りである。大量売買になれば近代契約になるのは当然で、契約した質と量を期日までに収めなければならない。８００トンのような額を完全に捌くには、とうぜんそのような近代契約を

求める大手と取り引きしなければならない。しかも甘夏には収穫がガクンと落ちる裏年がある。大手はそんな事情を認めない。気候と生き物相手の農生産を工場内工生産と同じに見做すのが、資本の論理である。大手としての生活クラブ生協をそのような面だけで見るのは、本意ではないが、生活クラブが「水俣病患者であることを忘れてくれ、有機農法食品という質だけで勝負し、しかも量の点で違約するな」という態度を鮮明にしたとき、それはほとんど資本の論理とまぎらわしくなってくる。資本の論理がきついなら、消費者の論理と言い換えてもいい。たとえば、自分の体型にあった多種類の洋服やワイシャツをできるだけ安く欲しいという消費者の欲求は、大資本のみが応えることができ、レディーメイド商品生産につながるのと似ている。そういう消費者の欲求によって、手仕事の洋服屋は消えて行くか、金持相手になるしかなくなる。

相思社批判の立場では、相思社自身が金もうけしたくて取引高を延していったのだ、という。実情は生産者からの売れ残りの心配の圧力をたえず受けて、相思社はがんばった。がんばったことが相思社の会計を潤し、相思社職員が働くはげみになった、というべきである。そして今回の通常農薬果の混入は、裏年のときの契約高収めのために、準会員・非会員の御所浦の低農薬果を相思社があつかったことに端を発している。御所浦の申請患者の同志会加入を断ってきたのは、正会員の売れ残りの心配のためであり、しかも相思社は患者運動をになっているかぎり、御所浦の生活の窮状を見過ごしにすることもできなかったのである。しかし、やはり生産しただけは完売という保障は無理だし、誤りだと、いえるのではないかと思われる。

このような保障がなぜなされたかという理由が、次の誤りと関係してくる。すなわち、相思社は患者への奉仕体である、という見方である。かならずしも相思社の職員が強くそうおもっているというわけでない。しかし、相思社の設立趣旨は完全にそうであるし、その趣旨に相思社の職員が沿っていないという批判は、第一次訴訟派に根強くある。あえていわせてもらえば、相思社は第一次訴訟派のために寄せられた基金でつくられたのに、第一次訴訟派の世話はそっちのけにして、新たな患者の発掘ばかりに力を注いでいるという批判は、当事者ばかりか支援する立場の人たちの中にもある。そのことを考慮しないと、今回の浜元フミヨさんの「相思社はチッソよりひどか」という発言の意図はくみとれない。

相思社職員は、そのような批判的風土の中で、患者と職員は人間として対等なのであり、自分たちの運動理念と患者の人生観はちがうことがあって当然であるという見解を正式にかかげられず、自分たちの生き方と奉仕が当然という雰囲気のはざまで、不注意からくる勇み足をやってしまった。奉仕とは自ら発するものであり、他がおしつけるものではない。そのことが常識になっていないために、生産者と販売の事務局は対等で、どっちもおたがいのために必要という見方が生まれず、事務局自体が過剰責任をおったり、患者側が不満とする方針をうちだす原因になったのである。

水俣病患者運動の局面の困難さからくる、甘夏問題に便乗した、相思社批判のうごきについては、稿を改める。